



門 4 曾 4
冊 775
卷 195

六道士會錄卷之一



目錄

松谿子艱難并卷山鬼歌

三途川賞月詩歌

六道逢僧詩歌

同勇士物語

守實美之詩

不貪美を立之詩

囚人警固之物語并心得之筆

走止者如こひ物語

風帆適意三途渡
雲吐銀盤河漢遠
笙歌遙閃稱名裏
可信一乘妙法力

晴景惱情六道天
江沉金玉冰波鮮
聖衆來迎觀念前
誰知台上即生蓮

之、傲河小、ぬあ小月すみあ

救世乃舟よの老のさるやん支

雲谿子此句或吟しおろく笑く曰老方はいま
た天堂の伎樂と称ひゆふて及てらる富き素一
てを留もひひひ貧賤小素一ては貧賤故ひひ
夷杖患難君子入して自得せむふこれ
北極天堂何の棟扶することあらん我も亦信あ
つと老方これ詠向と呉れり夫を陰の徳とるやさあ

下弦を遊の上俾小効ふ浮雲光と蔽へる散するこれ
自若り多波流と揺るせども香曲して幸は照臨
て清濁改多ぬこれれく櫻と濯ひ足とあふひく
よくを推うる一とびハ明ふ一とひを晦くして時
の通雲と示し一とひハ缺一とひハ象くしてをの盛
衰と見えん嗚呼衰小非ざることかまの六韻と賦也
宵漢一輪月
盈虚忘得失
皎々如新浴
高明能照物
弓勢見神武
晴暉滿一方
隱居與時迂
臆々堪共憐
閑雅誰爭妍
鏡光示智圓

利名無繫意

對影思悠然

去つらざる宿小うびてゆくみの
月小棹をん三途川うね

六道を偈持歌

さうくして向れ宿小うぶる郊原漸くして四小涯際れ
く煙旁張さうげく塵沙面成り川りか小僧一人
出来つて雲谿以んく曰汝いばくにはんするや 雲
谿曰 不知其所来 何不見其攸往 僧曰汝
夙縁小因く人思小生るとして心小浄去と念せんは小
佛名以唱ふことれ 罪辜おほくはくしても極樂生
生すいごう一合あやまらば地獄小墮せむのく 雲

谿曰 喝

乍麼生是地獄天堂

僧曰

まよひ来一と始めとも去る彼の

さうくの家をたはみかへしむ

雲谿持作のく巻

玩来無物暫成物

物去不知何處歸

地獄天堂人世界

落花片々任風飛

極楽も地こくとおぼはしぬをくらの

来ふもさうくはゆくとおぼえん

僧笑てさうくさうく小燈の光とるる雲谿悦てるゆさ

さうのぞいんれは奇業なる座敷小武士とみえさる

者大勢あままり居くちめや小物語する神なり

雲谿老不口より入く新来の七老六道小迷ひん

たゞこの火とつとくもせれば亭主と見え侍
いさしや泉者の長途小疲せぬらん是れあり
てゆりくや休息しぬとて茶漬はく物もた
どこ多もささいすて出あり

六道勇士物語 後増

座の人の北樹もくも安海もくも武士不取こぬけ
先居せぬものなり孝小と骨何もも寄合はる者少
さる出の内用もさぬ事あるは流るは是連
たる具ありし一舟中後の奉加をうづの事あるとも
後と六堂塔を建立しちる人の吐しと一又つとも先
てこぬぐとも不意の變小應じて力の用はなれ大
なる益あり奉加の法を一度志用ありてを立はる者

の吐しは身交も用小まとのなり伴いすとも少後母
是へてもささむむじほのさあてせ小用は奉加の法
を集めく物共はらふ同かると世間利害得失
の吐しを流しても少ても何の用はなれ事れこと
皆むや感ひぬ人の志いとく志小の疎小を人あり
若く者とありめく云けるも心を使活して挽まき
らん本取要の故小人を常小大丈夫の志は去らふ
勇とさる者心常小困む心縮つて困む時を生て此を
に益れ勇ハ血字は以物と争ひ勝こととつとむら
はあはれ此氣は心活して速く泰然とて能決め
居することれく建ふことなく天下の大業小あはれも
心持動する事あるの成なりあはれ心ゆる物小迫るら

らん学問しつるを初く此心の自由故の收活し
内務動するにれく困むことわづらんごめあり若月
くくむく不自由ありは学問何の益あらん心迫
つて若む者い昔人の足此不立のこくゆくありこ
ばまゝゆくを以てむひらうことごとく小然り困れ
ぐるすべし極をいさぞめん義なりん

守実義之法

或人のいひ一人を実義と云く要とひて忠といひ孝
といふを根を実義と云く出るとのれり心の実義
失ひくはする本も吾なりといふも實物也
根を故も吾本も未遂ることありては勇も実義
より出ると勇は始終挽しことあり血氣の勇を一旦

剛強なりといふも欲のこゝろ動さるるより又を刃の本
よ及むる特し不刃をまゝまゝありん心変ひり者然と挽
原文子明智日向を右来血氣の勇者勢をとりて
死の見るるべきを以て知たり只欲小動者あり
くを実義と失ひ実義のちりなき者は欲小初く
者なり欲と実義と相反する者あり

不貪しく義立し談

むく上松謙信の家士班鳩重元浪人の好加茂清正
れあり来りしと来りし時の詞を寺次家此池田
市郎清志と名祿の勇者士の義士といふ也
武ね感懐れ今親祖父の勲功より何の功もなき
為年れ者小父祖の祿を承りしを志と傳め終ふ

半銭よおわくハ君思ふ事多しと云ふ人おのまじ
其功もあつて親先祖の功と云ふ事小者く我をめは乃筋
親祖父はめは老ありなごりよく人は代り人の上小まむこ
とと款一少一の半も上不足はつひおのまじ故をふ
主人とあつてくひひくをせしむる者を見せしむる者之
元來腹の内より主人此思ふく成長く衣服飲食器
そ介は令の自由と云ふと介は應一々半はうぬを解
か少く少一藝能とせば是一人ら一くかううく紋を
是不とのあふは何方一はても言一兼る半れ一主
人我と云ふ生る人無藝能の者とおれは振ふあらこれ
目のあぬ主人おと一ううをどひひくまふれあふ
他人ゆむ半と云ふ者を思成さうされを其一はれ

亦少くむり人のあふ御する半のまはる春童子
腕と云ふ事うれくく小おのまじ功成場あるく者お
此木の葉ハ彼の班鳩池田がまじと云ふもまじ一は半
ある武士する者可怪半お

囚人警固く物格并心得半

昔時栗田氏柔ハ軍術小長一法大右法流本を介
つ才満く故ありく
抑疑と云ふは揚別は縁付
も何某くもやふ物以て軽小たりこませ警固くや
時侯と出くは道人をまじれる所く何者くまじ
二百人むり移居く警固のにははとそ我ハ栗田の
つ才少くは生はは友師一士の別とそは法流と云ふ
對面は友有り入家あり是故あつた大勢を考うとひ

ていひは目ひの切て見たり 政言國の仁に少も通儀せむ
奇特なる志を以ては後世の勳ありとて中へくをく
に案なる時物も少くして見たりて後物と志を案田
と案物より中へくして度せしめ我を案田と右の揚小江原
て少くも久りて考へきあはれは少小案田と判教し死
骸れ上りて後切く死んじらひきささめりて勢を少子
ども少くあひひきささめりて芝のふさ指ければ案田これ
て何ともし是との法出出原信の法を少く成すはなむしぬ
御教と案言揚州と誓ひありふ罪れ少子細ありたり
我知りてまゝ目小少りて案と案へ皆くは案田といひて
案物の内へ入られて少子を一面目ありて皆すくくし
まゝくゆきり 誓言國の仁に少も通儀せむ 案物れ右の方

に付添く案田の傍と一すもこれと見まらりて是は輕よ
えりあまをくくりきり宿小案く後を別後しれり熱
く囚人の誓言國の仁に少も通儀せむと案れを彼等と切合
ていひて御大誓と切伏しりたりて案小囚人候とて是を
らんは主人の越えまもなり其男も後成夫なり力ハ
於よ少りても囚人さうもともは案言國の仁に少も通儀
せむと案物の案ハ常く完物すとて案少り熱して武士
たる案変よ用べき物と案ハ常小支交きと案と案物と
急好の時を案おほくして案がたれとの好り熱して用
案の物を常小支度して立づくとも古き人のいれり
又案田とまんがかりは時憤満志氣ありは少子
ごも心の心もおのりて躍動しり

年中をてしむるに中をてしむるに遠くはるうし多分の
者後にもして想ふも中をてしむるに如後の家とてしむる
下しく死にまてしむるに人々の心を極よゆ年お
と承りたりし中申物を世分をてしむるに如後の家とてしむる
たりとてしむるに如後の家とてしむるに如後の家とてしむる
も如後の家とてしむるに如後の家とてしむるに如後の家とてしむる
進子の者もしむるに如後の家とてしむるに如後の家とてしむる
の物語なりはるうし多分の
秀しくはるうし多分の
年中の半あり

士會録卷之一終

六道士會録卷之二

目錄

走込困べき者困ふべしうさゆ者と年
同心得之談
西玉丹て手討仕損し物語
隣家より垣と潜り來者と談
狼藉者留系心得し談
吉田馬場にて出合喧嘩し評
助右刀し談
北園にて仇討短意物語

道中船渡等心得い談え
菊池安房狼籍い言ち組く留め物ぶ語ご
古人こ經へ刀とう或り用りひい一い決けつ
童子どう一い僕ぼくをを傳つたへへ物ぶ語ご
北きた國くにああくく火ひ災さい足あ程ほど垣かき硝しょう籠かご先さき登のぼり

六道士會録卷之二

佚斎樗山著

走は込こ困こへき者もの困こべくささ海うみ者もの半はん

或人のいづく主人の屋敷までも河まで自分の屋敷までも
あまきう込者越さぬひく出さぬいづき一通り忠法之
そらちふかふすき者あり主殺し親殺しを勿
論の義なり或を令浪忠欲侍は似合さる半密まふ
の人討立退ふ者も、籠屋を繩ぬけ死罪切後
此場をたづねてよげ来るものは主人に對して不義
不忠の者あり其上檢仗のとのそ答のうれは此事之
傍軍の罪れくして科ふおちい家ともうり又凡そある
主人の怒り越おろし罪あるおろし死ふ扱ひする命
とのごとくあふ逃来家とのハ不義ふた忠義ぬけ

侍あり是城より不き道ありは不より多主人とま
人との老恨いなる事にかふ者もおのまが主人に對して
此不忠也すく不義之道の者成しなけり罪れ者成
咎よおとん不義不仁ありあ所得あるは事ありはの
こと此者よはそつこのぐるべうぎれ志程成ひきき勢死
ちめておひ是事の人成討て他の所成しきしを込
我玉の時の老風とみえたり此時は右みる款因成
我不義乃ちまひあく男役成法とめく我とよめよ
我者よかこひくおまぬとぬく武士の志地と此志と
似くかさ秘く我う用よままべきよの志よ骨ある侍と
おしむの情ありたもあへり今を信せあり法家よこと
いふを親族まつことあり人ばらちてあへりおまれば

同士の侍の終

故もあへりて一家一統の勿論先の人よも苦勞とりを我
命とかり生延るまであり人ばらちたりは我が不忠ハ
遂よりを場あり扱切く死するを勝せると
まといとく去ること者れあへり論より追まこと家
時此方へ決してありすこといひたりおまへ出しは事ハ
おろりあへりばなごいあへりあへりあへりあへりあへり
忠者両目と失ひやむこと成得ひことと論小なりす
此事小打果はことあるもの也んゆらぐへんを勇と
うへるはこととむはなをうたひあへり足失ひては追まの
者のいひまきのさへやんははあへりいひやうは飛あ
れは主人と主人のいひづんまならものれうよく弁士に

西國より手討仕損く物語

むく一石玉のさ家存申すく手討とする不と譜代の
為黨うらうより能討て留る故小邪魔は成く
お換どか一切つあくふぐきり主人志小を為黨を
切らりて追々けまごも他の厄波(まをこ)り先の
主人志小同くくこひおきひをうふぐきり先よ
つこの手討しら者を手討のは換どにやうて終
浪人しうり志小同くくこふまはれ者とうあひ志小
もたれ傍家浪人志小う勿論手討も志小はこあ
ぬものなりかきまると疵を討てたあ方は手討のは換
になる物なりかうの本ハ妻子をこハ下こも志小をかく
づここり或人女子を他へ嫁してつこりけるふし

つこ白夫あさんなりり手討をせなるあさん付
こあぬ物なり科金はたつこぬ用心して居てこあ
ゆせうり是等々物も心得る人あり一切とせる
者うらうり主人(きり)付かどせはあうれ本望
是は依り前の人とらあてらあ黨は志小切捨たるハ
むの事あり喧嘩の裁判かども心得あるづき半之仕
形あきれお手になる半ありかあるべ色をうけ
裁判する物あり亦度むこ心得る手うちせん
るはあうらに婦人小見成おくうらんとまづめなま
ぬやうめて討たるあおらうたやうれ者よを
は傍軍よハ格うこ是れと論せんをうら小出して
討すべし亦傍軍の手討する側は居るんよはあ

以半あはれまうして討入る一掃うみうに討
つゝんが討入る手向ひ主人の手もあまうたうバ
うちを為す一先まはう後得あはれ入る一うく主人
の手ぬうりふたうぬうにたなひ一およう討つるこ
うそふまうしうかづばい討つる

隣家より垣と潜り来る者も終

あはれあまう隣より垣と潜り来る者も終あり宵の月
をれい主人の迷足付を捕へうよく見れ隣家此奴僕
なりさうして志のふ群もたけり中けり人言の肉をそを
とハ盗よ余はあても三落流石もあの人下女は切殺し
其上より書を投うんとさうに中ハ礼心の所ハ此世ハ
此隣と申か称く一此世に留めく此世に留めく此世に

ら坊やあまうたもあうつゝは定以おろし一後ハ主人の傍ハ
此世に先非取く垣と潜り来る者もあまうたうバ
うまおつた刀少く出けるう大戸よりたけり一そ子
細あり我物中ししは者をかくめ意以て云付くこふいと
せん縄とけしを並て出けりおれおれ一此所をたき
肉は入るこれは何のかしら本もれく主人小巻くもた
れ通かり人を殺しける屋もあまうたうバ
亭主何半は束中存るあまうたうバ
外一客のいしく何のこしうき本もたう
曰うてかとうたう本もたうは言僕も一此所ハ本あま
今宵せんまう坊んをかくひ言うり門と志めをたうた
みえびしうあまの曰う半れくそ者の居不たれを

強きやふをいふ事申すよとて彼方のめ重なる者はいし出
 るに先づいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 のいひいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 今宵欠落は係下しと申し出さるは不徳をいふ事
 お前のいひいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 主人のいひいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 さに次は忠に欠落は係下しと申し出さるは不徳をいふ事
 中をいひいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 志し来る事いふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 此半より掛定多害れと申し出さるは不徳をいふ事
 害をいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者

狼籍者田家心得の談

其次のいひいふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 人と対おのりしていふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 向より傍輩の来る事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 人と相とけきふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 まうして切せき事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 どの侍といふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 けいばせき事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 追廻りし事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 討まはし事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 を助ていふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 毎していふ事隣の主人のいひいふとお遊外への者
 心あはし事隣の主人のいひいふとお遊外への者

高田馬場少く出合喧嘩と評

先年江戸高田の馬場(出合)お果しつるものあり
双方此助方十人より或を子(こ)負(お)せりたりも
或人先を揮(ひ)くといふと想(おも)ふと喧嘩口論(けんわくろん)をうし氣
より出(い)るもいふとせむと危(あや)むこと以(も)得(え)ば或(ある)理(こと)ありて
是(こ)れに事(こと)もあはれん已(や)み尽(つ)して其(その)上(かみ)に悔(く)み
ぬ事(こと)ありば近(ちか)くともう多(おほ)く相(あ)ひけむ小(こ)判(はん)救(きう)し
場(ば)あり後(のち)に後(のち)に死(し)すといふひつめて目(め)をたぶらな
きれば仕(し)扱(あ)する事(こと)あり物(もの)あり力(ちから)をうむひくう海(うみ)く
や先(ま)と切(き)んとおりふ心(こころ)より仕(し)をこねるものあり亦(また)志(こころ)
勇(ゆう)めれども血氣(けつ)よせりて肉(にく)をうりあはれれば仕(し)扱(あ)する
本(ほん)あり物(もの)ありと危(あや)む常(つね)の心の老(ふる)ひよる危(あや)む或(ある)士(し)する

者(もの)をたぶら心(こころ)をたぶら事(こと)あり常(つね)にうりつるものあり
老(ふる)ひ生(な)す得(え)る病(びょう)ありぬ者(もの)も事(こと)小(こ)判(はん)で心(こころ)動(うご)け仕(し)扱(あ)す
恥(はづ)れ事(こと)ありお月(つき)も又(また)果(は)れ状(じやう)と付(つ)て出(い)合(あ)をうし
事(こと)ハまを心(こころ)りはありせりハま近(ちか)むといふことあり
危(あや)む事(こと)ありと親(おや)親(おや)教(おし)育(そだ)てて守(まも)りたすもあり
助(たす)かりよ又(また)危(あや)む事(こと)あり何(なに)の言(こと)教(おし)もなき後(のち)事(こと)あり
親(おや)双方(たがひ)つれ切(き)れ切(き)れ切(き)れ切(き)れ一人(ひとり)の命(いのち)以(も)て死(し)んあり
大(おほ)勢(せい)の人(ひと)とそこあり事(こと)あり一人(ひとり)の命(いのち)以(も)て死(し)んあり
朋友(とも)らの不(ふ)に死(し)りこと又(また)我(わが)國(くに)の時(とき)は正(ただ)の風(かぜ)をたす
今(いま)後(のち)に政(せい)あり人(ひと)とそこあり命(いのち)以(も)て死(し)んあり
以(も)て死(し)んあり命(いのち)以(も)て死(し)んあり命(いのち)以(も)て死(し)んあり
また命(いのち)以(も)て死(し)んあり命(いのち)以(も)て死(し)んあり命(いのち)以(も)て死(し)んあり

あしひよひしりうこそく死なれりうも多かれがては後すけ
と出し換はせし後く切後すりうおの年れりうは
まれく男も立上との不忠もあはれ親にむかへ
めともけいれ我々もあはれりうとては後すけ
ご一切合はあをたたりこそくおまじりては不忠可なり
いひまればみはむ物せとてさうちに介さうあはれひを
つりては年こそあはれりう

小玉とて敵討経負物後

其次のいこく先年伯父乃仇と稱しぬてあはれ
方こそ存けり人仇越方小居こそく小玉はては年中
孝親縁者ありて家来のいこくに取てこそあはれ
居りて志を奇特ありてこそ経負こそ思ふなり男

ありてゆい玉の解きこそ高きなりをあはれりうの
羅を法者れを答めかりは論して終小解きと
きりこそりうり國主の扶持人といひ人をあはれ
うりゆい小下死人小切後りう大津とてりう者
韓信が人の股とてりうりいれありてりうりては年
あり

道中船後少く心得と終

或人のいこく及中船後一寺少くりては後家来の
は論する年ある物物とて時ハ罪非といひは先を
おそれとてきびりてさうはものありては先より
てこそりうはせぬものあり其上少く先のりうの
らこそあはれりうりてはありてりうりては年

えさごとく事からま我を幾と引付感どうかきお
とれくまきし自身たあつうえは半より地
思あぬ半も物あり先もあの者試きし種は先の
者我小なりあつひつのは半あれものありもあの
者ハ後中とはすくえさじれ何あれ下これ口論
主人の喧嘩小あり先の主人主事内もく自身
とあつひつあつは先と下これ口論もく喧嘩はる
れまひはあな及まきくは方の家来も綱法もく
口論は出しはとあつひつるまきひくさうり中ひる中
ゆてハケ後の家毎方あり半中く喧嘩はあつひんさ
んにおとれくまきし自身たあつうえは半より地
は方の者に疵と付たうばせも分あつひつ通つとくし船

あつひつよりあつひつあつひつあつひつあつひつ
もこの室はく先と先の主人ハ中を下この喧嘩
ゆてハケ後の家毎方あり半中く喧嘩はあつひんさ
んにおとれくまきし自身たあつうえは半より地
は方の者に疵と付たうばせも分あつひつ通つとくし船
あつひつよりあつひつあつひつあつひつあつひつ
もこの室はく先と先の主人ハ中を下この喧嘩
ゆてハケ後の家毎方あり半中く喧嘩はあつひんさ
んにおとれくまきし自身たあつうえは半より地
は方の者に疵と付たうばせも分あつひつ通つとくし船
あつひつよりあつひつあつひつあつひつあつひつ
もこの室はく先と先の主人ハ中を下この喧嘩
ゆてハケ後の家毎方あり半中く喧嘩はあつひんさ
んにおとれくまきし自身たあつうえは半より地
は方の者に疵と付たうばせも分あつひつ通つとくし船

三ヶ所うじつりし久末前せよといひしつゝ

をどしてい主人と主人の喧嘩ふれ半く心ぬし先を
途申すその半なり別宿ふ悉ての半より宿道よみあは
向ふと年てたて殺しひさす一日後日の泥あは

菊池女房恨務く言伝る物語

其次のいし火半喧嘩ふらあは色とまらあひ
知りあはむむし寛久子中ふ星見れおを赤松
上野く菊池女房と相折る事あり國主の力ふ小町家
富き半ゆを山某家の宅ゆく双方対決よおふあ
りしより女房をたれ巧ゆ一言のいひもけもあへん
ふりに泣おと退去し廣石の上ふ中おふ尋二帖内と
隔り上野へ上ふ女房ハ下に居たりし女房中おは

今一度や上女半あといひし三恨務と極く上野取つ
けおふ二可小切殺し奥のふゆとふとおおふ山で互
進み切ける女房悪込返るし一ふがうとうと山が
面とあはらに切けらう志とくくさるはれた海を
なればかたは次のるより星見の使者星門某子送て
伝るなれども根籍と伝るうしふ色とちげんは社
会あたるも取廣石よりたはんとまといひて
何者まらあはん何のふさうもあく星門はうら
ちとるん切けらう星門はうらくうらく人者といひ
女房と泣れとれ切けらる者れ教と額より切けら
て角小女房やうそこ取切てまらうり子あまおあ
山本回士村も多うりせるといふれども大概やく女房と

あらぐ小切敷一々此疎勤の始儀を呈見、公事物治
とら書ふ様々此家名までつづいた載り、此時分と
を人言傳ふが長根指にせ礼ありとてを天六六七寸と
の根指と公儀さうさう用さう此喧儀の時大根指を
さうさう者行とゆさうさう其よりを上大根指と
出さうさうさう

古入根指の用法

其次の令けりあるもの古人の經さ根指とさうなる
者ふ其故と云せれども答曰途中少くハ口と用るゆゑ
是ハそもの器量次第何ほどなりともをさ用る事
あり根指ハ庄敷の上のさうさうさう造の務負れり
力とかなゆゑハ長根指せんき何う近くさうりて胸

中と突抜ハ短小利あり長さいつさうさうゆふなる
半のゆふ古人のみな短きと用ゆさうさう是とやま
一理ありまればも庄敷の上さうさう口をさをたかく敷小礼
心者指籍者あるさうさうもみな編指の務負あり其上階
ハ大石の庄敷上れ小ハ玄冥さうさうハ家耳小礼を編指
さうさうさうあさるゆゑハ不念此指籍とあふ答事あり
まればもあさるは上下の時ハ控以長さ根指志り
さうさう一様ハ編指さうさう又口ハ麻上下はさうさうて扱
さる扱さうさうさうさうさう可ありさうさう一人あ
り又何ら大石の庄敷に大背ありさうさう上のさうさう根籍
喧儀ありさうさう一交小口はたさうさうさう口扱と川傷と
がよんよと噪さうさう事ありさうさう熱さうさう白砂さうさうの

事なりと口取執く出たし虎友の内をバ細指の
とくこれ有り所お(出るあ)バ池と持て可なり

童子一僕と志をとり物給

お、あやを人一僕に洗入考るたの僕主人の可家
ごふを人取あふけり方おの口づゝ急とまら半習
し十六歳の嫡子と人あるし一奇怪の事おおも
ひある時、劍術の師の許より何とれいひせりハ
り一をびと成ゆす一人取傳家おいさうにいさ
ふんと官師と何の心もつゝ侍を自力人と志を
ぬとの有りり志を半何ん少は本力も何ふ
てもあ合とのあゝ急おとまてうにほけおふち
事お守生ふしと其とあゝ志をるとの有りせりな

ど小腕おてうううやなうりあけうまそ大恥を
あゝんじさうう半すういひあるとのあ
者心得くまそ例のさゝ悪口と志を本力と持て
有りひもようぬうゆようかこびん肩骨うけてめ
おうつげおふちあせく守お守生よして何のあ
もあゝやううと志をう志をのたふ志をう討を志の
人よ侍し其より上之近く成敗しうおとて自力する
ほどあゝおと志をう志をのたふ志をう討を志の
お守心あつ時ハは候と志を物と志を人のいひ
北とあゝ大災足程強弱先登
むう小玉筋と城下侍を志を大災あると城内(大のこ
これとさうく来る上下お月と城内よあ守りおる

取よ二の九垣硝せんじょうどらのよふりたるをなれはみなるを
行まとひりしうりりりしを伴ふ定程を命めいきり
は元もと大おほくはりしと此こゝにありたりし首くびは
胸むねの胸むねありし一人も命めいする者ありしにちり居
たれはし何れも命めい助たすむとあはれは百一四ひゃくしよの元もとを
らぬとれよりしこゝに秘ひ目めを事ことあるとて建たて命めいある
力ちからありとれはしはせや人ひとこゝにありてあはれ持もつすみち
まをば一色いしきふりしをなれより修しゆつとて者ものもあは
まをば終しゆうふとらと瓦わととれはし上かみの元もとを
ありしそれより火からつとていふと下したの元もとを
ありしよりちりしとて故ゆゑに團だんをすれはし先まへ登のぼり足
程ほどは新あらた知ち二百石にひゃくいしつとれはし老おきなも功いさは
なりしとて福ふく

ぬらうししを家中うちの人ひとこゝに

伊いとて曰いちり居ゐる者ものも命めい助たすむ者ものなりしと
本もとはこれよりし事ことなりし中ちゆうに早はやく心こゝろを
決きめしとていふはしはし先まへ登のぼり足
程ほどは新あらた知ち二百石にひゃくいしつとれはし老おきなも功いさは
なりしとて福ふく

方かたふひも特とくにわたりし心こゝろを
決きめしとていふはしはし先まへ登のぼり足
程ほどは新あらた知ち二百石にひゃくいしつとれはし老おきなも功いさは
なりしとて福ふく

考く心不試し口々ぬ半人よ心ある所はす
 それほどに心許れぬ物に我志ありきりふ事
 ありふし時の志はよして何の事も心づけをうり
 くも書人なまじりく生身の骨はて聴かぬ人
 又白人はつとあく先登し一石は依依木柵原
 洛川の先陣よりし功大なりぬる一命の言者
 試うろげけて人より先とせんとの私乃志は物
 是に成たに力とあしせく一命の功とせんは志
 のむらし治業の軍小田原のふ命忠繩が先陣の
 功中もこれなり也

士會録卷之二終

六道士會録卷之三

目錄

盜賊屏幟破承詔と見之談
 乞人途中めて我子の喧喚と扱物終
 斬罪者檢使邊宿心徹物語
 火災く岩茅屋幟防く仕形物終
 圍門戒怖物終 九五ヶ条

六道士會録卷之三

佚齋樗山著

登絨屏と破れ法政見く候

其次座の人いしく吐夜風のまきまにぬす人入り
 こふ家あり瓦敷の隅は屏の破とて此何處此不
 ちり入るといつくは振りて同よを人かいつく是
 かよるを座つとてあるあはあは熱して壁を打た
 る方の屋敷をまきくれとむひましく裏の方大に
 窓々物好うは屋敷を六箇のまきくれとておきた
 病とてうは是箇より座つとて物好うおより窓の入
 うらやうにけんする巧なり登るあはば内小を庭へお
 うりまはは内よも侍す家者おとといせんてくれ
 果して登内よありなり又も庭庭指れおとて内よ

ぬすびと何うおより奥の庭の屏へ椅子ひりけて坐
し者もあるゆへ

乞人途中ゆく我子の喧嘩と扱物始

或老人所取毎てけつたごひよ依のゆみ人とは違へる侍
友人は喧嘩とは出で双方法とおひのる御する者あると
まば一方を法取らる一人一方に我子なり彼おぢ
らつとおひひいごその中へ友人は留へるびつとま
がりてやけるはそらあう中へらんせは双方法
きく様とおみえ中へ日比の法を恨まていざりか
くの町中よてまぶまぶいごあて時の法は論を
むこは得ざるまおくは庭あるごとく何ひて
年まくりあは者ここの通うからまんすていそ通

つとていふ悔いし扱ひよ入中へ双方法難の付時
あはれ法あつひはへくるは法悪あまは通う法
あつとていふんぎんよ大扱ひけれは双方すうは理窟
とまひいれども男らまさうとつとあまは法とま
えこの事ある物まは法つとて七年に寄
婿子をおひし持中いあまはも真弁をまは男の事
あつとていふつと若方法け中いあは力に覚え
たはあまは法もは法あまは法あまは法あまは法
友親とあまは法あまは法推系れつ法いあまは
て様とつとつと法いあまは法あまは法あまは法
本もつと法あまは法あまは法あまは法あまは法
幸平よは通うあまは法あまは法あまは法あまは法

本心と不用とも入用此本と考たに云々一常小心以
りちひ後(大工志子ハ警えつち心小すれば格也
乃子ハ知れよと後まらん一を家ハの本小心用
とるまう一在をれは子ハなをこゝの心小あ終
あのみ自他をあらぬすかとのれ也

斬罪者控史を宿心働物論

其次のいしくいあ西公城下を斬罪者乃あでくるふ
大寺の法中中途小待法は者之候宿を以て出家
にいつしとていふと上と神行禱まといふ是れ控宿小
と下とといふ側又付くる同心もこれ控宿の者之
宿を宿り候ひし中まがとて法中を宿ていしく出家
の名も中りといふをこの者中待ずる公寺に帰る

とていふ控宿はる小切きまされはるも是れおまどは
いしく囚人はけりけり候はれ候は候はれらるる方
すうともあぬいづのも法出家の心意非んたよ法中其
う法中の控宿まてやとてび寺に宿り候はれり候は
候は六を許(を)とて物あくとた控も控候
候もととも夫宿し候はれ候はれ中途小を許(お候し
るを控候し候はれ候はれ其ハ切候候はれ候は
あはれ佛は候中本まて囚人候はれ候はれ候はれ
小切候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
いれ上を候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
いれあはれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ

け者を捕縛中... 下... 出家の法と...
 捕縛中... 繩と...
 ... 切腹... 命...
 ... 囚人...

... 一人... 法... 斬罪...
 ... 囚人... 斬罪...
 ... 出... 寺...

たしけ者のさこふ本をめぐり小治産にありて
あまの法下せんれく寺ふりきり

密中少く諺て日換はあふれたるはけいなり
悪病あり坊主と對し連中より角と官言しつ
うよれよりことなり又法中より彼法
中或家の他法と云ふ只坊主を去き者との心
滑く大船と云ふなりと笑ひ傍人此いよく
あ彼法下何といふも少入ればけいけい
ぬ時はいへせん曰是れれれ押をへりあり
りれをれつむめく一囚人とハ寺小溢教して
もよ法下諺ありいふも小ねりも換はの
役を廣く

火災と市第屋防ぐ仕形物語

むし丹川の町ありて失火あり類焼も多かりけ
る所の町あり町中此宿をを集めて大防と
宿ありきり年より一者を令けるハ第屋火先
ちうせれ火う津もやすく人もさうして防れぬと
のありは依るとお風下の屋根とまらるは防ぎ小は
一は是もさうさううがと物ありて中みすりにぬま
ちりしとくもゆるんを上下におくくはあつら加
え退くくそれより大うりてくあつらもあつらぬも
のありは自今ハ所中一役少は付所は十人より十人
とら役と決定め其者を集めて今より一の繩と用意
侍り老人は十筋は細小付徳と持出此人救おの事

ようまじい辱辱へあがり何一ぼと切をれ腕の屈辱
衆中へ手入件の縄と伝する者く下へあげかう
人ハトまき丸退社中ハ人斗も此や今とよふとの
大屋社ハ時時よまると市といふ事ハ得心せよと
んとうなる所作ありといふ彼者中老るハ近日私家のふ
支助と伝を帝ちく不化といふをせは同ようく
自然れうれ出さ流かろくといふ事ハ此れちを自
ゆるとく傳ふは性といふ事ハ亭主出有拍子本まてお
島城とあ十人ごり件の人足城一友よの傳せを辱
伝まろくせけるよふほどの大屋社と時時よまろくを
なれろくめ事ね心くたなる性形と感心くころそ
れより廣き所れあ一人所小十人つ中付をるん事

此こと一切は心伝付とバ我小説する事ありて内小傳す
教こと

閨門の戒愆

列座の中よりを人いひるは凡常に心伝つちいすめ
情じこあもこれ中小あしつこむこを妻のる
ある事く人の妻あるものハ大此事よまろくはまハ
かくさぬとのあり或中あくあ當下女とあま主人
の妻ハ教書伝付するとの妻大ハおとろよ下女と年付不
厘子万此くびをゆりてをりてまろく板の事とらつ
くくくこのあ當まもろくこれいあろくろくわやう
るくくはあ中一人と何れどもは女このろくよ此
事まのけろくハあ當下女とに罪おれろく

世に夫ふつとて流るるの事業此半に
念よ申ひきこま人あもて今すは力に
早ひさく先とこむとて申人の取れのうち
流ふん流すく出入り者の心法とよく似せまの書
の方におれ〜に教とてこのまの目あつたおに
おつてをたり主人此文とつてひ〜の取れおに
可〜こみ切教〜宿るる書とせめあ切たつ書切
とて〜流る〜下女流人今〜と在のあやと流るは
下女と評て〜に流る〜に下女と〜即時切教
の書はあつたにこの深初は〜の書も欠落〜
馬麻者去つたに成て〜切腹〜とて夫のそら
流よおよむ早〜の書か〜本と〜よしく

夫ふつと〜この此礼流〜と人の流〜とて
本その人の書あつた初とて本れと
成人のい〜とて男女の目とて家の法と
らく〜時を下〜と流る〜とて〜の
禍あつて〜とて科人お母家よのれうおを
とて〜とれ〜とて初とて家の法と〜と
〜とて法の〜とて〜とて
懦弱〜とて〜とて
又い〜とて〜とて
す〜とて〜とて
枝葉生〜とて〜とて
流よ〜とて〜とて

つま山林を焚きいさうしてむくひをせしめてあつた
程子志いすめゆひうれ

右志の人のいひ人の書の溢りあつて人よかふる
半を夫の心懦弱して家内男女入交り他法正しく
さうふより物なり家内の作法正しくび男女全しや
そくくならぬをそれなり旅く書子よと禱あつ半右
今を頼むは情むじき本の才なり書と要らるし
志あよもくしひきをせ家内男女の他法正しくすべし初
め考へてくもてハ後よ法正あつてあむとすればおほく
あつてくも物なりとてめざらしく心厚なり風を
ひあひよ法と正しくすり耐を礼法正しくむつて半
よるひまのおよそをきくごやうればもるまよはかくし

ておの風俗となり崩れやすれたものなり書に物を初
よるまの言以用たりあつて人の書あつた嫁一たるごめよ
り我すくむる者ハ掃けり初ハまの言ふまごも二年
も居りみくまの心以んすり悔つて紙すくに半と
ひひまようくしてあつて思へ家内の他法あつた
是よりおつて後よまのいひ所を心よけり半
あまは顔色以変り或ハ泣きあまををり或ハ
世帯より何く家内さうく扱お存れよりまも是
非をく書あは心正たり半あり書ハ是よ利とけり
いよう我らすく以りぬものれり又久く居て子も
もあつていごあれを依よ去ることもはせぬまむしり
と傍家友連れども是見といひてまづあつて半よ

すら半お母一子書あものちつらひく親家すり者お
母一是くそんドめよ候まざるが改れり書あはまよき
ひ家内のを法以助る事天地陰陽の及すて人倫の
法れを絶かにまのつる法以用ひず我がまよとひぬとの
を人倫及及よそむく人倫の法欠ふ時家の滅亡
がひれ一子孫お續のみちにあはるべしと此の書あ
てそを子守とておのれ此邪魔もぬゆ物あると亦
目およはまの言ふまよとるまふくして半法はふも
のハ世一に心ありて世一に心よりハいぬ事とがて
なふべしとそりかて一法はも後のおまう出る者此
人の書あはる者まが一の事まよまよかひことなよと
はく女のたふんがてそら半あつて書本のたれと

事と書あたる初よよくおまを法一とそらめふまひく
西まれば火のこびひうて滅亡此のまあらぬあり
つと述づく事あはるまらうて一法内礼家の法あり
は理とまらひてううくと書よ割せとて家のや
か書以侍者ま夫ら者の恥ありまてもまの言ふま
くまらる者ま家の福あり又心費くまふかひことと好
ひとのま家の恥もなまらる都る福のたれうそに
めふ書一と子くまをたるとひ子たれともそ書よ
ひるまらるる法は法印の本出する時ハ父子
ともた恥とまらる者れり亦我死して子の身とてハ
此本ありても母を割とて絶つハよく係系断れ
く暴はる一法以滅して恥とまらる時を先禮の不孝

けり毒其聚るるゆめふ心とけくても実不実成
試く可れ又毒の満ゆるに心よみえくそれとも志
まげうごうきこる本河へ虚実成れをぐるに
他の半ふもせく志をく進す人よけり半はれ
かくのごとくまれば毒も疵れ人よもくらび子たの
ためも恥をく奉れも虚実とれくはも虚れ
る時を人よ実の疵とけりゆへ毒の親れ増えぬ
との物やうごうなる花をくば虚実成れくはとのれ
りうごうにやると毒あは少時も指さくは兄合虚実
成るをむじとるあちふ毒なる時を人にけるを恥と父
系とのけりたとひ虚すても常の力持てくは
心あるゆへ人の目よごうごうなるゆへとのけりた

やうの毒あは家の毒けり去く替をくまて恨れもや
伴もさういふとれと名ふ毒あふる人よは
ふくは他の半ふれと去るこれ毒の情とちゆり
下り

一人のいしく我あり時友進の中よ悲びつまはくは重し
者あり父母悲つくと是と結むむじととけずと彼
女は後さう女はまて親族の方ゆへ半もけりんか
度れゆもあくとゆへ困究せり彼男をゆへ
吾ふさうくと女は殺さんとまれば父母の怒成れと
不孝れとけくくうんがら何は只不作の子あはあは
りと彼も罪れ我ゆへゆへはゆへはゆへはゆへは
やうさくすれをんを不残悲の甚しけり進退迷

妄していんもすんにやうをいひかゝるまじりの男生
得^レ不直^ル者もあはれ一旦情欲^レ迷^ルて死^ニ候^ル者少^ク
不^レ依^ル事^ニありん^ト是^レと救^フめ^ク可^クなりん^ト依^テ持^テ
て可^クなりん^ト隣家の先父^ノ官^ニを父^ノの^レ位^ニは^レ是^レ大^ニ
孝^ニを^レ今^ニま^ニを^レ持^テる^レ母^ノの^レ彫^テる^レ者^ノ少^クお^レの^レ忌^ニ
と^レ洞^ニを^レ遠^ニ後^ニ難^ニ生^スず^ルと^レ覚^悟し^テ持^テす^レに^レ忌^ニ書^キ
以^テ持^テて^レ親^ノ死^シて^レの^レ後^ハん^ノの^レま^ニに^レか^テて^レの^レ料^ニ管^ス
より^レ出^ルる^レ物^トみ^える^レに^レ然^ラば^レ親^ノ死^シ待^テの^レ
情^ニあ^リて^レ不^レ孝^ニさ^スる^レも^レ許^スる^レ事^ナら^ズ也^ニ然^ラば^レ也^ニ
て^レ死^スる^レ事^ニも^レ親^トう^レか^キお^レの^レ心^ニ出^テ
親^ノ死^シ待^テて^レ死^スる^レ事^ニも^レ情^トを^レ遊^ビと^レ欲^スて^レ
ん^トあ^リて^レ不^レ孝^ニま^ニり^ル事^ナら^ズ也^ニ大^ニか^クの^レこ^トを^レ禮^シて^レ

末^ニ神^ノ心^ニに^レ物^ヲあり^テ然^レに^レ彼^ノ男^ノ人^ノ心^ニに^レ滅^セる^レ親^ノ
怒^リと^レ悔^ミつ^テ女^ヲ出^シて^レ後^ニ救^フこと^トも^レせ^レん^ト迷^ル心^ニは^レち^レ
れ^レも^レす^レう^レ公^ノの^レま^ニに^レう^レて^レ不^レ孝^ニを^レ恐^ルる^レ心^ニあり^テ
又^レ罪^レれ^ル女^ノの^レ我^レゆ^ヘは^レ死^ニは^レま^ニ以^テ怒^リむ^レ公^ノの^レ内^ニも^レ
か^レ不^レ仁^ニ不^レ義^ニ愧^ルる^レ心^ニあり^テみ^える^レに^レか^テて^レ死^スる^レ事^ニ
此^ノ時^ニは^レ父^ノ兄^ノ親^ノ族^ノ心^ニ得^ルる^レに^レ事^ナら^ズ也^ニ子^ノ分^ニれ^ル父^ノと^レ
戒^ムる^レ可^クなり^テい^ハり^テの^レま^ニに^レ持^テて^レ死^スる^レ事^ニも^レも^レ
死^ニは^レ恥^トと^レし^テ子^ノも^レ我^レゆ^ヘは^レ小^ノ人^トと^レ教^スる^レ罪^ノあり^テ親^ト
不^レ仁^ニの^レ名^ノ通^ルる^レ事^ニも^レ者^ノを^レ此^ノ時^ニ小^ノ当^ニつ^テ迷^ルる^レ事^ニ
よく^レ相^レ礼^スる^レに^レ死^スる^レ事^ニも^レある^レに^レ然^ラば^レ子^ノを^レ救^フ事^ニも^レ欲^ス
て^レ却^ルる^レ人^ノ子^ノ我^レが^レ子^トも^レ小^ノ害^ニ類^スる^レ事^ニも^レある^レに^レ時^ニハ
い^ハば^レ我^レが^レ女^ノ分^ニを^レ人^トと^レし^テ彼^ノ女^ノを^レ救^フ片^ニ付^テ死^ス

既よきこと以まぬまうめく可なり終るは母もを信じ以
收ひ子も心拔安むししくね毒のりもなると幸よ吾子
先と少ハ心以つくくして貴友もそ父兄親族も毒しく其
罪とつひに終る終くおより救うめて可なり世下を
親乃子とをなふたをうん幼少より道とつふ本も後親
つふ本もまうせむ氣事つにそそそ成長して吾本と貴
時を傲よ怒るしく其子以責む畢竟ハ其親の身持
あしく情とつふこと以まぬ氣随して私めを以めふ
成よま子も是よんおひ多まうお母く親のまねとす
る物ありおのま年むて浮氣も志はまりて後子の行沈
の空しくぬ所尼ゆり故小傲よ責怒とく子以戒とこも
知おより氣まに生えてあひ深るおの心依よ毒のさ

そりれ亦誰とてま愛子の人ありより心行もよまんと事と
欲るま人の親の情ありまれども子どものゆゑとつてせん
とすれおのまが力持むつてきふよりて後を其方の器用
は牙よくもあしくもなる物なりといひてお終るもあつみ
えたり是子と棄るれも能つてま志終る
又いしくもく子以愛育する者ハ馬以育者れ駒を信る
ごころ馬の性なりと陽氣と交くすくやうにすみゆ者
也只邪氣のよあ小害せしむと持ておつて不能成る
はてあこいぬ核の癖以する乃も能馬以棄る者
をこれが邪氣と抑進む道と啓く独りむれ
性にかふふいもなれゆへ馬困むことな馬の困む者ハ
みな邪氣と以らるる困も是よまも癖とするのく其心

邪の才を精しくせんて只おのまがまふ所をさるる事な
此と云あうて一匹のあはれとせざるを鞍とあててひく事
るしかろうと放す馬をむむまなけりしあひ都るべ
邪氣を引出し或はしきくやあまを今もそをたれおの備
成す方こそ解し一気馬よ所へくくべ一切のこをみれざる
人心もく不善なり一害公去時ハそ固有の性ときふべ
らば幼年の内ハ戯れを以て心とす物なり世にも心は付
奴僕も皆く戒めくやうそめれ抱まも偽巧の事と教ゆる
は妖怪乃談とあうてむむく幼年より偽巧の事小智ハ成
長の後とも心よ波付くそ害おほし怪異の事と云ふ時ハ
幼年より氣と締め心は談うて元來ふれおのまふと生
活生の氣と害する物なり世も幼童以戒る小妖怪の事と云
おとすハそ性と害する事毒殺よりし甚しはなり故小幼童
よ偽尼とを付べくべくし幼年より怪異以中る者ハ
心健うて迷れく氣縮らざるがゆふ夢中に覺たる事
れ一試さると何うしか不識正小向うめく邪小向
志むくハ知の宛るまはくひく美理くし名目以てを
立不義と愧るの心と善ふ處一義不義の分以てくさる者ハ
利害得失の介心を執くべし初よりて正小進つて
と啓すして佐小きびく戒むる時ハそ性へ交りて
却て邪氣と引出しこころ一善なる時ハ善業一不善
あり耐ハ和め多おのつて進て善よ向ふく小教音以
くくい一と言うて成やすれやうあれた大形の心つくひえ
をゆれざるとあはれ馬と嗜者れ馬小心以用するて

尤ももる小心致用者を家情の好む所又欲の充了
 あり故小自然の如く用家と心得し子と教育
 するも情の在むこと故にざるもの如く馬よりも殊にす
 るもはあはれ故小孩見の内をそ心致用することと
 してこれれ然しそを教育れたる言はず只姑息の意
 のこしそ其ゆへに及ぶと教えず成長の後其陵よ成
 る親の目もあある時此をきめりこはるあはれ
 せらる勅とあるとどし只これをかろひあ却て邪に成
 引出し父子のあはれと不和しそ終小不慈れ孝不孝
 此子となるもの

士會録卷之三終

六道士會録卷之四

目録

- 太平記 評判と評
- 智恵才覚と辨
- 文法が一往と辨
- 心気と辨
- 心法と評
- 松谿子 閻魔城小玉

六道士會録卷之四

右平記評判之評

佚齋標山著

未座の人志いよく右平記の評判はいつとあらはれざる
 上座の人といひあらはれざる右平記の評判は楠正成を宗とし
 て論じたる物なり正成は志を義裁にまうて一毫の
 私なく誅を時とあらしめ泉の湧出をふらう一人情よ
 慮下士率の信服をばさ法と出し是は極一を成
 育に故よ士率おと重むしとてうごかすむくことこれ
 家は席従一人とて教と與しう切きる者れ
 是よおわくを實法とて評者の言を正成を以て宗
 としそのいども其志功利とまうてて宏識のつらうに
 出する者あるは是正成の法に知て正成のこゝろを

ちる者なり其半以論むる不程といふ他と他の兵
書は比きればなる所おほく初学乃才以去するは公重
宝なる書あるを然るも功利の私其志掩ふるさ家
不あり是は習ふ時ハ大小心術の害あるを故小を書以
讀者其法と方力のなきと取べくして之を志を
学ぶべくは是は兵書評判と見るの情なり一切乃本
其益を以て之を害に推す時を天下用のべらざる家の
物外一凡て物小執する時を害あり推す時を用ふは
以只中これと用て不正以用ひざる時を害外一
向何故以て功利の私を掩ふべらざることを知る
曰悉くはながごとくして二三以奉て然るは官軍箱
根以引退といふことゝの事小云東國の武士武田吉元桃

井石堂を初して廿八人連判其誓帝を以て義貞
忠方々中をけりけるは家々守る氏々下知小従ふこと中意
やを阿るべ今云家の政道邪ありふらるる天下は武士
憤る也孝小守氏朝敵と成り由小往下知小志
ふ不あり義欠り一公家の忠を誅して天下は武士
以助者然るも何ぞは乃方小まのうき人抱るは此連
判は限るべ能う東國小おわく弓矢以たはよの者義
貞小勇一守るも不忠以存る者阿るんや子く公家合
神の心いとむるがては皆幕下小来りも忠義を
彼さんは旨宜く中後下由良舟田下山加も英が方と
中越しこれども義貞一礼といふく君若くは
臣ハ以て臣さすんはあはる今守る氏は隠漆家

て美貞節度成終るし身成一戦不利と失ぬす天
下の人口心うれ半たり不何の故もれく美貞亦朝欽
あらん半天下の人宜恥と知らる者といらんや栄
て諸人は指とありんより尻城軍の晒して名と子
孫の復栄に残さんとなる也として終ふ取川終る
故小下山加と名と高失たり是美貞義也処一
欲よひうまは私のみあふ心成動うさる者なり万世
忠臣の濫をり赤松律師則祐類はあらん抱ふ
この評判よいく新田の中や忠あり面方何く美貞
あらん一殺多生と助るのたあり湯武の道ありと云
此評者功利と云とて美貞のことと知らざれ之忠
と云るはく美貞れく美貞とこれとて忠を評者何と

美貞と云へる厚るん不審これ末世の人小不義ふ忠に
勧むの評なり故小論に功利乃徒やとすれ湯武
と引てふ所の口実し程子後生と恐まて上よ榮
討つ悪れ下湯武此聖小あらんむ八則とすらん
と新し終る賢者の後世と云むとすらん海ひうね
榮討つ悪る天下これ生民小禍一人全にむけて独夫
となるて下の法度おして湯武と云るは己ことと
得ずして天小以ひ人情小應一軍成おう終る其さ
武王討つ自殺の後討つ子武庚と立ると云るを此終る
天下武庚と君と云らんて武王と君と己ことと云
終りの也まて下の評小曰義貞世のあ存のあを
るるびりて只一力をまむずる小何く君の留を

やうなり是亦功利のつらうの心よると出て不義の言と
吐くこと欲あふん力と辱しめくあは富んこころ君子
の為ざるをかり此軍元來新田足利の争論より幸
起り天皇義貞小興しゆふ所高氏胡敵とむらんぬ
るに今義貞の家れあとして胡敵とむらんぬぬ
名松律師則祐とおれど禽獸のひあつむの義貞
勇よ伐つて敵と侮りし知謀の足ざるを評する可
胡敵とあつすてあは滅ぼんとしてふも不義の至
極あり又楠正儀細川頼之が招き小應せざるを律て
いしく三代の楠知まゝいして二代の討死し正儀以て
尔をり邪とらひ小邪と以てするのたとあはつむい
そしる此名も亦周武とらひいして邪と伐小正と以て
する本を古人もそあつむいして邪と以てする本とさるんかの
下は此私言希すふはす楠三代忠戦し家とも才と
も持たれどこそ未代右義乃名を残りしれたは後日と揆
てあつしあつし是二心なり二心の君子の恥るをあり
豫讓が假し趙孟小才ざる志は古人の歎稱する所
なり嗚呼正儀乃志を万世の師と云つては評者の
いごとく假し小軍小はつて時たまつ内よ正儀病死せば
万代悪名と云ふ父兄の面と垢す者なり中庸小曰邦
道ふれ時死小至るまゝく変せざるなり正儀乃謂之
知し難し支場小居く始終志と変せざる所を父兄小
劣ふないさうもれし謀の足ざるを生質乃不才を
不義といふべし評者の志を正儀とさる功利の

やうなり是亦功利のつらうの心よると出て不義の言と
吐くこと欲あふん力と辱しめくあは富んこころ君子
の為ざるをかり此軍元來新田足利の争論より幸
起り天皇義貞小興しゆふ所高氏胡敵とむらんぬ
るに今義貞の家れあとして胡敵とむらんぬぬ
名松律師則祐とおれど禽獸のひあつむの義貞
勇よ伐つて敵と侮りし知謀の足ざるを評する可
胡敵とあつすてあは滅ぼんとしてふも不義の至
極あり又楠正儀細川頼之が招き小應せざるを律て
いしく三代の楠知まゝいして二代の討死し正儀以て
尔をり邪とらひ小邪と以てするのたとあはつむい
そしる此名も亦周武とらひいして邪と伐小正と以て
する本を古人もそあつむいして邪と以てする本とさるんかの
下は此私言希すふはす楠三代忠戦し家とも才と
も持たれどこそ未代右義乃名を残りしれたは後日と揆
てあつしあつし是二心なり二心の君子の恥るをあり
豫讓が假し趙孟小才ざる志は古人の歎稱する所
なり嗚呼正儀乃志を万世の師と云つては評者の
いごとく假し小軍小はつて時たまつ内よ正儀病死せば
万代悪名と云ふ父兄の面と垢す者なり中庸小曰邦
道ふれ時死小至るまゝく変せざるなり正儀乃謂之
知し難し支場小居く始終志と変せざる所を父兄小
劣ふないさうもれし謀の足ざるを生質乃不才を
不義といふべし評者の志を正儀とさる功利の

心より見る時たもあざりてより見時ハ同然する半外
父兄の時を上り承り正儀ハ逆境ヲ若く志ヲ失くさる者
なり是等ヲ其一二ヲ挙てその解ハことごとく論ず
べし只自己心伴の天理とまじりて是と詳しめて可なり

智意分あ才覚を辨

智ハ我ハ心伴以知るより大なるをれハ及理小あり
しりて得ることを外ハ澄の物と写して些も私ありごとく
かを智といふ心伴の靈明ありざるを私用ひ多彼を
是と此以非と分つ是と分別といふ意識の化用な
り意識ハ知覚あるを知覚の働き利用小巧なるを才
覚といふ是生質此器用なり道理とまじりて私を
時を分あ才覚も知の用とならば正成是れなり役人

主人の命とうをもとむるなりと半とひかぶる今の人ハ
及理小なりと分あ才覚小巧すといふおのまこと利する
を知といふ浮者の論乃類世あり主人の命と交す
て役人私の働とするごとく只知とまといへば意識
乃才覚也まといへば

文武平一徳を辨

又いふ文武をりといふ徳ハ總ていつ時を天地の
造化ハ則ち陰陽乃化と布人民安く物各其不
成を生長遂法のたれり分るいつ時ハ礼樂と教育
するものなり是と文といふ春夏秋陽氣の物と生長する
がごとく政教小従ぐるは暴烈とれりて人民と害ハ國
が小禍する者と對し其屈するを以伸る是は武といふ

秋冬の陰れ菊物收斂一実以固くするがごとく
武を殺伐と好む小阿くばくの殺伐と文の者いらよ招
く不なり多くと人秋冬の風ハ一なり是よあふて実を
固くする者も実以固く一零落する者ハ零落す風ハ
一あり文の者の質小よくと生殺分る武を一なり
懼とく怖む者も是小依く身とちること以得悔てお
くは者は忽身命と換ハ生殺ハ皆らつらと是とたるや
造化之心とて凡とさう一草木之心とて生殺とれ
人をも有心とて造化小則つとて小文の者も亦有心
とて生殺とて凡とさう一れつと皆らつらとる所也武
以止るの字と合せく武乃字以作家畢竟礼と法
治と助成れされつと陰を陽と合し陽を陰と合しす

て小文の象ある時を武と合まざることありて武といふ
文と合すること能はぬ故に文よ武と偏まは文と偏不
偏廢すといふ是陰陽一氣天地生く自化の道れを故
小治せよと文と必く固天下と安しと武ハ偏く礼す
とざる本と志あり礼せよは武といふ暴悪の者と野
文ハ偏く民と志す礼実以志あり治世に武と偏く
暴悪を民法以おう一暴悪の者生くと固揮うあり礼
をに文礼礼時を人情安むせりて士民とも小治くは文
あよ武ハ虎狼乃猛きがごとく是と武といふは武礼
礼文信礼の意悲怒辱のこくと是と文といふは
共よ天下よ安んず治むべし

心気之辨

又曰一身の動靜を治るは作用なり此れ活する時を決
り力あり流り滞りこれ形小病と云ふ事少し
好悪の情溢れれば執滞せざる時ハ内迫ること此れ神困
ここれ情心の物小觸てうごけたり僅小動く時此れ
つら心多氣の冥かり心と氣とハお離れざるものあり故
好悪の情動て溢れれば執滞する時ハ内塞りて神
安らげん神安らざる時内いよ暗し是小病と云ふ氣滞
り流り道小するハ五腕病と生じ形伴も亦別徒なる事
あつたれ氣と心とお離れざる事小試て知極し心
憂ふ時多氣塞りて亦氣疲る時心くればよく知て
知る事あれば心くしん知事ありと氣くしん又いよく
書と讀むく生死禍福幽明鬼神の理と知るといふ

も心裏の迷恨断せざる内を情の初く不ひくもくを原
安むざるのあつてざる者なり命小安むする事能ざる時
神困むこと以免くもは故小静なる時を書以よむても
理と悟りて是と心小試く物小接する時を情の動く不
で情よひらるここれ内小省りて心の惑ひを解
只情のひく不は惑をすくくを非と知るといふ
制くは物あり大ま乃志と用る亦ま此一路小あり

心法と談

又いよく人心りて不善れ只欲り不を必とて此小
私念生じ私欲是と明けて種々の巧み偽り是よ
里生る偽巧のこはと以人と欺きおのこは欲り不を
むと此心以て物小接する時を親族むすく朋友

和をばんと並び多く争ふる事ありてあつてはばむを欲
する所にひかれ多ううそ信を制する事ありてあつてはばむ欲
心消るる時ハ心此一神安うす私欲小是と若境に
し若境に入てううう嬉する者も惑ひりれ心と事ふ
ことある事より吾はれ孟子のいしく知者いそ事
なり而はれぬしうそ事といこと言のそん不
あはれ大智の人あはれんハ事改めぬことありん
おほく我勝ふよふ事とまうそ事と謀ふひりし
て甚とううがふそお似て故小変小愈く大はれ
動はれりめより後とまうそ変改考一悟て事と添る
時々のきもあつことれ一武士ハ常小変とまうそ
貧乏士の恥はあはれ偽巧の事とありてあつてはばむは
市中小面とうううそ事と恥あり

事といこと改めぬことありてあつてはばむを欲
する所にひかれ多ううそ信を制する事ありてあつてはばむ欲
心消るる時ハ心此一神安うす私欲小是と若境に
し若境に入てううう嬉する者も惑ひりれ心と事ふ
ことある事より吾はれ孟子のいしく知者いそ事
なり而はれぬしうそ事といこと言のそん不
あはれ大智の人あはれんハ事改めぬことありん
おほく我勝ふよふ事とまうそ事と謀ふひりし
て甚とううがふそお似て故小変小愈く大はれ
動はれりめより後とまうそ変改考一悟て事と添る
時々のきもあつことれ一武士ハ常小変とまうそ
貧乏士の恥はあはれ偽巧の事とありてあつてはばむは
市中小面とうううそ事と恥あり

心常に静まり理のままにすりがゆへに事と正しく動く者
を心常小此一私欲の巧改容るが故之四時の運り日月
のひ度風雷の疾弱を改めれ陰陽を改め盡すよりて自然
動くこと改めざる者なり聖人易改作つて陰陽造化
の理小原つて此心作とまへれ故邵康節のいしく先天の
学ハ心法也六十四卦の爻交皆自然小動てこととをばむ
る者なり聖人一毫も他意を用ふべし聖人の一言一詞皆

易カハナ小あはれと云ふことな。後の聖人ト云ふ者ハ聖人の言
のカハナ易ハ則カハナ應接のあはれと云ふは易小從ひく動てこ
づうと云ふは易ハ造化の神道物小伴して遺ひてく
ざる者なり吉凶悔吝ハ変化應用のあとなり故小易小
あはれと云ふ者ハ吉あり易小悖く者ハ凶なり是著策以探
らばして常小ト筮する者なり易曰不恒其德或乘
之羞孔子曰不占而已矣君子心に決せざることあ時
奔戒して神小向のこ至誠の感ハ懐度して志る小
つゞげ今故なくして物の吉凶を占ふ神何ぞ告んや
占つて吉凶ハ兆あることふともこれあ心の意あり神の
若もあはれれば故小易ハ小人のこあ小誘くばらば天の
自然のさふて美の精ハきとらうび化意の私と用る
ことこれこととゆずして初く者ハ易と讀びて易小
なるよのなりことと云ふは初めと云ふ

松谿子 剛魔城小玉は

松谿子未席小玉ハ中居りしが末ハ文は席と遊
て出ぬそれより守るなりはば鉄の橋あり内は号
鉄炮おもしろ長柄三つた具立ちあは牛乳の乳とも鉄持
てつれ門と云ふ内より唐人と云ふ人とも云はぬ者出て
高身ハ其姓名を問ハ俱生神と答ふ松谿と云ふ取を及
た剛魔の帳付と云ふまふと云ふことと云はれ曰哉ハ汝俱
小はまはる片時ハ汝が力と云ふれと云ふ者ハ故汝一念の
ちめ小おわく吾れまづありて即ち此小ありし重
續て剛王の内小かくる儒者も我と心の神明と名付

亦良知といふ大學誠意乃章の傳小母自欺といふ我
 心乃神明とあざむくことかれといふの伝あり中庸小其
 賄ざる所小戒慎一閑ざる所小恐懼すといふ人の見守る
 をかろくといふ家よりいふことありぬといふことあり松谿子
 少ておし池ののちぬ人の付をひあうはゆる事なれとい
 俱生神の曰や子のいれはるいしはる一念心と改る時を
 事小性と争あり故に論治小道則勿悖改といふれり
 といくろりありありあつてゆくほどに教の構つちるて
 宿魔城小といふあり

士會録卷之四終

六道士會録卷之五

目錄

十五列座俱生神直言

并視目嗅鼻常玻璃控業秤と終

閻王悔悟

學問ハ書を讀不讀と談

出灵并生灵死灵と論

天子七廟并祀堂之談

赤鬼悟道

六道士會録卷之五

佚齋標山著

十五列坐俱生神並言并鑑秤と傳

松谿子を俱生神ふしやうじんと云ふはつと身をもれく王城小玉
 つもく内玄冥より入り内以窺うかがふと十王列座あり
 次の乃ま八八道の冥友みやうともも當ある族しゆ悉く並居ならり同王
 怒いかまふ色いろして曰我十五の列らをといふとも司寇しこうの職
 を蒙ありお月つきの冥友みやうともも以支し死し一七者の善惡ぜんあくを礼
 し黄身わうしんとていて三子さんし年ねん小せうおよぶ然しかる近年きんねん視み目め眼がん
 病びやうとまらひ眼がんをみく吾われ惡あくの足あしさうく正ただしくくは嗅か
 鼻びと凡ふつ邪じや小せうおつく鼻び依よるまて嗅かるまひおほく
 乃な波は璃り玄げん澄じやうも曇とんりて明あるまは業ごう乃な稱しやう心しん計けいは
 相あひく定さだらん是こ依よて極ごく樂らくへまま記き者しやおほく来きはし

秋より清智めつらふびく人成りて追返され面目と
失ふのこそ冥友とも及後ふれまなりなく私の見は負
ありとみえたり此は急度お改め冥友たすも折言命を
さ勢吟味いしよふと後後俱生神をせまらる
我君の側は片時とあつてことれ視目を王の眼ふ
代と雪明の用と孝子を嗅鼻は王の視む少ざるを
を助けく感通の用は有る者もこれに其は小志心
成けく不慮し王志心偏倚して是非の眼塞りて禁
視目が眼病と成く其邪心成見ること明らなるべ
鼻は見少と離とく神氣は通する物あり王の心私
と神明感通の結とぬとて後小鼻が鼻はよりて
其用とをいしよふとあつて後心の神明智の本伴れり

王の心表怒好悪執滞して自性の神明と蔽ひ妄想の
泥とぬく鑑小ぬるは後小鑑を照し失く物と移し
ことあつて情欲内小動も羨小従つて本性の権度
をうあひ物の軽重成れ遠へるは後小業乃秤比針口
くらひく定まらぬは皆惡の罪少る所せず視目鼻も
鑑も天秤もみな心伴の妙用より成りて仏の立並ぶ
物もくは痛王この理小暗くして罪以外の惡も後人等
をわす内直うべりて外乃心しは事いよ是れ拙者
直言の役人なれば後とつて見ゆ中上亦冥友ともは後
小とまらるれと修らまるとは十王道と修り心正す
邪れく不直ありて邪なれ者たは心小付は事いよな
らば正すして邪な支冥友ともは修らまるとは後

人よも命ぢうらうらうとて世をめぐりての心盡すして邪を
冥友ごも又そ心よけひらるる心盡なる鬼どもと多うひたを
下位も代もし中けり少く世の中をめぐりて彼不盡す一
邪なる冥友獄車ごも八月ひくもびりて勢ひうへひ
らうらうと恥て心とせぬふて世をめぐりて宋王の心道を
せんてをるの小智は好らうらう是く恥て冥友の
道をたどく世なる者とは鬼ありとて用ひますとふ
うらを智也えすして利害に校きてとん者と用ひぬと
彼てとん者小智の才えとみく王の欲するをとば世を
正して情よけやう小時のるをあたせく王は怒りぬそ
の鬼どもとみれとのまご心よけひらる者ごらうと用ひ
地獄中てとん風ふかすく実義はかくなりやと下

風俗ハ上の好むふよる物少くは大学の備ふ上にと好て
下を好まざる者あはく世をまきとて今するふそ
好むふよるすは民徒はとん上への心不盡すして
下の風俗とてとん本と欲するは孟子の所習ふ本
縁く鬼を求るごことなる者なり只地獄のこ小阿比
吾人一身れ中といひてとん心すく心作とて情欲
の妄動るは時ハ偽所の邪心生るおなく神多しむと
れく病生るお患とてまぬらう孔子曰吾道一以
貫之とてとん心の天理なり心作の妙用天地万物
を貫くの義なり仏乃曰三昧惟一心んお法とお
那とて一心作とてとんまをち天堂とて地獄と
なるとの好り

簡王悔悟

王怍然ぶぜんとて曰我われ又また育まりて古いにしへ人の私ひそをも踐つば物理ぶつり
人ひとも達たつせば通俗とくふく物ものも見みたりことなるも古いにしへ今いまの
時とき變かはりともく只ただ目め先の世よ智ち才さい先せん試しみづつ先せんと
大だい切せつの貴き身みと竹たけ奴やつ故ゆふ此こゝ誤あやまりとく今いま俄いつ小せう書しよ
以もつ漢かん智ちと日にっ書しよの山さん入い也やいりてと官くわんと書しよと書しよと書しよと書しよ
俱く生せい祚そのいりて王わう学がく問もんの大だい本ほんと古いにしへ存ぞん知ちを只ただ古いにしへ成せい
よむとる以もつ学がく問もんと書しよ問もんたる世よ間かんの誤あやまりと書しよ問もんと書しよ問もん
存ぞんに只ただ先せん舜しん乃なり時ときまをそむ合あひ書しよ問もんと書しよ問もん
只ただ心しん律りつの滅めつを失しはば情じやう欲よくもひりてと書しよ問もんと書しよ問もん
先せん王わう舜しん小せう尚しやう心しん法ぽうを允いん執しつ其中そのちゆうとて此こゝ於お中ちゆう
心しん律りつの天てん則じつなり舜しんの禹うは尚しやうかふ小せう人心じんしん惟ただ危あや道どう

心しん惟ただ微み惟ただ精せい惟ただ一いつ允いん執しつ其中そのちゆうと示しし物もの人心じんしん在あ怒ど好こう
憂うの情じやう然ぜんとて心しんを天てん理りのうへより教きやうする如ごとの良心りんしん之これ
好こう憂うのよふ蔽かへて易やく故ゆ小せう微みありとて惟ただ精せいハ工こう
夫つまの精せいたるあり惟ただ一いつ純じゆんの誠まことなり是こゝ古いにしへの学がく問もんな
りかゝること心しんを自じ性じやうの冥めい明めい蔽かへるること心しんを
以もつ國こくを治ちむとて王わう治ちまり家けと蔽かへは親しん族しやく睦むつは
く物もの小せう交かう系けい和わして争あひとて一いつ倫りん人じん道どう立たて物
おのゝ其その取と以もつ風ふう化か自じ然ぜん小せうの是こゝ学がく問もん乃なり大
中ちゆうれり今いまの万まん世せいの書しよハ此こゝ不ふ以もつ細さい小せう秋しゆうたる物ものな
り早さう竟けい学がく問もんを家けがんの変へん化かとて心しんを自じ性じやうの是こゝ
あふの天てん理り誠まことなり情じやう欲よくのよふ心しんを自じ性じやうの是こゝ
此こゝ不ふを自じ得とくを以もつ此こゝ心しん活かつ建けん自じ在ざいして天てん地ち万まん物

我不得^まる物^{もの}れ^り書^かは^きあ^らわ^るの^る子^こや^うは^は聖^{せい}人^{にん}の^しは
え^ん終^つふ^ふ去^き其^{その}あり^{あり}介^けの^の半^{はん}は^は何^{なに}れ^ん今^{いま}書^かは^は何^{なに}れ^んよ
んで^よ右^{みぎ}今^{いま}の^の事^{こと}実^{じつ}と^と記^き憶^いし^し人^{ひと}の^の家^{いえ}亦^{また}あ^らは^は是^{こゝ}を^を必^{かならず}く
祿^{ろく}と^とい^いま^ま人^{ひと}の^の用^{もち}半^{はん}と^と言^いす^る者^{もの}是^{こゝ}に^に史^し官^{くわん}の^の学^{がく}同^{おな}れ
る^{なり}史^し友^{ゆう}の^の藝^{げい}者^{しや}役^{やく}人^{にん}も^もく^くは^は大^{だい}人^{にん}乃^の学^{がく}を^を名^なる^るの^の半^{はん}ふ
て^て其^{その}所^{ところ}を^をく^くは^はあ^あま^ま中^{ちゆう}上^{じやう}は^は通^{つう}り^り心^{こゝろ}以^{もつ}て^て明^{あきら}ら^るし^して^て其^{その}減^{げん}
と^と失^あは^はれ^れ情^{じやう}然^{ぜん}ま^まし^しら^らる^る半^{はん}れ^れ仁^には^はく^く下^げは^は恤^{あは}れ^れま^まえ
必^{かならず}く^く貴^き爵^{くわく}と^とい^いし^し物^{もの}我^{われ}の^の私^しと^と去^き邪^{じや}の^の念^{ねん}れ^れま^まを
以^{もつ}て^て本^{ほん}と^とい^いか^かの^のお^おと^とれ^れ下^げお^お乃^のづ^づら^ら作^し取^とり^りて^てい^いふ^ふ
お^おの^のま^まに^に私^し私^しと^とい^いて^て上^{じやう}と^とあ^あら^らむ^むこ^こを^をく^く凡^{ぼん}俗^{じやく}も^も
勇^{ゆう}く^くい^いし^し小^{せう}智^ちと^とい^いふ^ふ下^げと^とは^は一^{いつ}下^げ巧^{かう}と^とい^いふ^ふ上^{じやう}は^はた^たあ^あら^らず
じ^じく^く小^{せう}智^ちを^を用^{もち}ま^まは^は用^{もち}る^るは^はど^ど害^{がい}お^おは^はる^る右^{みぎ}今^{いま}の^の因^{いん}襲^{じゆ}

礼^{れい}度^ど法^{ぽう}式^{しき}の^のお^おと^とれ^れを^を史^し友^{ゆう}の^の儒^{にう}者^{しや}は^は抱^ぶら^らむ^むと^とい^いふ^ふ今^{いま}の^の
半^{はん}取^とり^りし^し小^{せう}智^ちは^は子^こを^を名^なる^る上^{じやう}の^の学^{がく}を^をく^くは^は半^{はん}欠^{けつ}
は^はこ^こに^には^は中^{ちゆう}を^をく^くは^は自^じ身^{しん}の^の考^{かう}を^を名^なる^るも^も及^{およ}ば^ばず^ずは^は其^{その}智^ち
徳^{とく}あ^あら^らず^ず一^{いつ}に^に記^き者^{しや}を^を傍^{ぼう}近^{じん}く^く指^ささ^さす^すと^とい^いふ^ふ自^じ抱^ぶし^し
感^{かん}通^{つう}の^の函^{わん}封^{ふう}を^をり^りへ^へ亦^{また}史^し友^{ゆう}の^の内^{ない}半^{はん}あ^あら^らず^ず者^{もの}も^も
其^{その}用^{もち}は^は名^なる^る人^{ひと}と^とい^いふ^ふ書^かは^はま^ま史^し友^{ゆう}は^は立^たち^ち或^{ある}は^は官^{くわん}馬^ば
六^{ろく}藝^{げい}を^をま^まし^しの^の才^{さい}は^は得^える^るも^もた^たら^らず^ずは^は統^{ちゆう}智^ち古^こ御^ご舟^{しゆ}
ら^らも^も精^{せい}と^とい^いて^てま^まく^く物^{もの}を^を名^なる^るは^は時^{とき}の^の賞^{しょう}は^はけ^けり^りひ^ひ不^ふ
用^{もち}ら^らず^ずは^は才^{さい}小^{せう}當^{たう}ら^らず^ずる^る者^{もの}は^は退^{たい}き^きを^をく^く不^ふ用^{もち}の^の地^ぢ
も^も立^たち^ちま^まあ^あら^らず^ず者^{もの}は^は何^{なに}も^もし^して^て不^ふ化^かと^と励^むし^し中^{ちゆう}に^にく^くは^は
る^る又^{また}七^{しち}年^{ねん}に^に内^{ない}は^は六^{ろく}藝^{げい}を^を名^なる^る出^し来^き文^{ぶん}武^ぶの^の役^{やく}人^{にん}も^も半^{はん}
欠^{けつ}や^やま^まし^しは^は抑^{おさ}へ^へて^て何^{なに}半^{はん}取^とり^りし^しも^も貴^き爵^{くわく}を^をを

まを勵しとれく亦うづう恥る本もれは物わくは其
友樹卒ととらうづう恥る本は其の風格ありと六つ
うへあれたのまをいし席談うづう述より

字百の書は漢し漢ざるの論

周王の曰然らば書と漢ばとも字同か成べき事と嘗て
曰聖人在さば書成るべしと成べくは今聖人在るべし
向小書とよむすを心小記と成べき事れし的をく
虚元小矢と射るごとく一たび一旦吾言とやて心小
感致する事あるても因小記するところれよりゆへ
情致のこあふらうと成るべし因小記する所あれより
よては篤く信じてよみ治るべき事中庸を事と
る處一此二書は聖人の心法と具小傳へて事道脈の

書なり周王老学れりといへども大学中庸成るも
の半は成治るべし大学を心法と用り成るは況中庸
を道の大なおのま小成らうと他小成ある事と況治
へるは此書はよむべしとて時をざる書れり孝經は文義近
きがおとくあれは言易簡とて至極の上の書れり
論語孟子は聖賢廣く道の應用と況く人小成る
治る書れり書は力次第によみく可なり六經とれ
よむべしとて時をざる事と成るべしとて
あはれは何れん事博くれば理小精くして益
おほく然ども只よみたるをりあはれ心小成せざれば
も益れり世間學術おほくは知識のる小止つて自
乃学まくれり故小心の用と成るべしとてハ口小良薬と

會て嘆小りるるがたう一香乳介小教はてしと職
小くまれば一身成運く病以治を事半れ然も久
く持たれは一滴づつも嘆小入事少くハ益も成べし
言ざるもはまさきとて益れしとて吐出に下をれ
君建ハ神年為小中在光緒とし小知年より道といふ
名とてふまは世百智の女是ふあつて情の向ふ
而も何智義を以情と制する事成るべし是は
て肉小くアも半れく習ひはふ水の小智力是は
以て情と助くる故小利害心乃ましく志せし
なり年長する小きとていひく乳過信長一後親のいふ
こともしきくぬ物少くは故は幼年より義不義れあやと
あつしめかりその抱びよし利害の説奇怪の談は

笑りぬ只不義談聊く義もあつふ心とや一を考ふ
世教育あるがたうは恥と考るる者悪むべし
れき物あつて人の子の氣障れるは皆親のあやう誤り
大まか言位をてそ職おひくまよふれは神君建の
傍には程以智徳ある人をさしおられ自然小感化あま
以後は傳交は道といふ人毎小天もあがる事のおうよ
大そつよ是く人のあつぬ事よ極めをまひ人のあつぬ
事あつは是と道といふは道と人て常に諷むぬ
きたり中庸小曰夫婦の君不肯とあつり知るく
よく知るくともう及を我心伴の天理教一を君の
ちりこれ好りおよりた来つてはあまは只情の
ひく不格く安心生ト偽巧おろく我々心伴の天理を

凡ん人徳のひく不介しても時を常小く見よく結で
私の一文字は去るを以て初学の要とん

出霊并死冥生冥の論

阎王松谿子と見付く此亡者何れの所より来る言
俱生神と曰是亡者よは何らば安楽より地獄見物
小来不者れまとして王の曰孝なり家世小来縁交半
あり近く事として勝布（よび付）杖少安楽小出是
と者出く人とおとく又死冥とと者ありて人小よりつ
くくふ地獄の事はずんぎびくか付（四方）小決の
あみと法一交地こくへ入るとの安楽（安ん）とれ
いとあくぬ者出くやと不審（さ）晴やれは出冥死冥ふ
どと物取んころ半ありや松谿あふく日名は取つ及

とて終小た後との思る半らるるありあまは半
こもなせしこ陰陽造化の變と正存知り小は不審
ととらひこれ地獄よりりも亦くはあは婦人女子信法
男子も婦人同然の思慮なるとのあくの執念（執念）あ
老も小凝（凝）くまより形ち死くても彼執念（執念）小くまよりて
敬く是此迷の念故は是執念の氣あり聰明の人勿論
を人よは去病（去）くく氣おしりて死く者よを決ら無
と物よを婦人女子を思慮乃執念信山伏（法）執念
た小迷より出くるとのあくは然とも出く人小喰付物よ
とあは根れは者あふくかびて散する物かては
是とらんくおと海ま氣とくあひ病と欠る者ハらん
おそとく氣と失ひはれがまどはるまハ言是は七者たハ

方々不存半より又死をなご中半は存命のうちを
えと怨ある者れ死して後れ付といふ半とすておるに
くとり迷心より多くれ半と定て口より獨犯
は家とのふれいられ散ごころる氣と我と定てく
者不者まては自分の呵責やうく不昼夜難美つる
科人と押ゆりしと求保ハ出出しと公る苦まて此
我生具の人よえ付とる中者の物語承はえつる
者の親きまものたけり者の方たててせは
ら半と定てはえ付る者の曰我ハ何と中不存
はときと中執念胸小くうりいら禁がごとく若く
是いとありえ付る中我もさうばといふあ方とも

亦人かひるひと喜者不え付るの半と定ては
是ハ根以るく定てはえ付る罪人を不
かのでれ類もく此方より多くの半定ては
い皆此方より多くの半定ては若むを怨
具不がたれ一切せるとれめはを信山はの来つて加持
祈禱する時病人の心実不加持言の威力と者の案
堵して定て心やぶる然具本は是ハ危くある者か
お放りくは疑つて案堵せぬ定て心やぶる然具
去てこれくは後とくはむの枝と切て瓶中小る氣を
まづた結る生氣成をく不故小瓶中小花を扇く
ども根れ支故は実とむすふことあるは
凋むこれ出具小似り梅の抄改切て桃と建く抄を

小切根れしども其の生れを以てしるす抄の
生氣は危しあふ柄と桃の氣相を以てしるす
なる老根ありしども枝葉を切て其用と失ふ抄の
根れしども形を飾りて用あり故に危しなる者
却て危しれなる者のみあふ生れを以てしるす
柄となる亦老の根より萌芽出づる者を柄とあふべし
遠くして他の字ふらざるも亦桃の一方の枝
と助あり一方の枝を切く柄と接し同しを切りてあり
中り所の氣をうたむと亦柄とあるも他の枝あつては
らの半以て試知終りてまゝ柄桃の柄以て切く柄つぎ
よりめんまては付ことれしども同氣あふぎれ危しあふと
れき故あり吾思邪正一切の半とれ存より正へと感し

本家感する半あり應する半あり危しある者あふは
長ずる半あり志れた亦小興らざる半は感する半は
吾人亦不感する半れく吾人亦不感する半れく感
應者長の理然識し終りて

天子七廟并祀堂之談

王の曰汝は儒士れり然らば又言ことある天子七廟
諸侯八廟大夫三廟士一廟といふ事何ぞや天子は
七世を祀りて一減して士は一世を祭るといふ半は曰
天倫の向を其情を殘となく一なり孔子曰君子之澤
五世而斬小人之澤三世而斬也あは言祀父母曾祖
父母祖父母我父母我まをみせたり聖人の道を血
脈相續て皇むは故に小を殘りし小言祀父母と四世と

多々半あり物限あまはそれより上の勢ひ系ふ半あ
たんざるがゆあり天子七廟をもつ用の制あり周を
后稷以ひて大祖といへ後是以よりして天子を七廟
と立右祖を廟と東面と立て其次文王武王の廟と
向合せしと立これ始のく合以ての君なり是と世室
といふ右祖の廟と二の世室といふ世不述の廟ありそ
とより高祖の廟と曾祖の廟以向合せて立社父志
廟と考妣廟といひ向あをせしと南北向と昭と以
小北向と穆といふ右祖の廟は西面夾室是と祧とい
ふみせしとて昭と穆の神といひ祧廟といふしてを
より昭と小北向と穆あり汝侯の廟は始て國と父系
の君と右祖といふ魯は月と以右祖とするの類あり

是方世不述の廟なりと前小四世の廟と立て昭穆を
序ひみせしとて昭と穆の神といひ祧廟といふして昭と
穆より高祖の廟と曾祖の廟を先祖の廟といふ是七
廟と考妣廟といひ考妣といふ廟小系する士八廟と
いふはこれ礼堂といふ礼堂といふ考妣より父母と
四をこれ神主と立て系する廟は亦よ作る礼堂ハ
ミが居るをよはく系を制是なることあり是中士
以上の半あり下士庶人を礼堂にほくはきほひし
れ一寝小まはるるを表中を掃除して時小高
つゝ系ふれり寝と考今此表座をの半あり寝
ふはあはれは代人の情あはるるして日本を

又母は期きの喪しはつとあり一年の内喪服さうふくをきて
つとめたりと見えたりと歎なげふ

かぎりあるまじりあぬぎをそつつ板衣いたん

とてかまとのをたるとありあは

此こゝに以上いじょう代しろの人情にんじやうをききしり今十三ヶ月いまじゅうさんげつを服ふく
しりあふ神かみおと忌い在あ期きの喪さうの降くだ波なみと見えたり後
をを降くだ波なみ小こを同どう本ほん志しげく是こゝふより人ひと情じやうもあ
つと降くだ波なみありと父母ふぼ喪さうふ十日じゅうにち奠けん鳥とりと念ねんせざるを
たりといもんや復かへ入いり以上いじょう代しろ系けい不ふ者しやれお母ははく父ちち
母ははをもくく危あやむむのこそれとんん士し二に廟ぼといい代しろ
代しろよりよりててややじじととええくくああるるべべとと今日けふ日にち
の服ふく忌い令れいは服ふくといい子こをを在あ日にち小こて喪さうといいあり

限かぎ成なりく其そのををりりもも今いま神かみおお忌いししととみみええたり服ふくははる
祖そ父ふ母ぼより曾そう孫そん玄げん孫そんと我われと中なかより上かみと下しもと世よ
あり今いまの忌いといい六む右みぎ日にちの書かき小こ暇あそびととて忌いと
あり拾ちやう枚まい抄しやうををも服ふく何なにヶ月げつ暇あそび何なに十日じゅうにちとありあり喪さう
小せうをを同どう忙まいとと上かみ代しろののこことと喪さう法ぽうととめめてて世よ用もち欠かふ
ゆゆはは人ひとよりよりもも哀あは戚せきの情じやうととそそるるの助すけととははり
手てをを以もつひひをを空くうののみみええより忌いといい此こゝる情じやうて物もの小
ままどどころ本ほんと忌いおおのの名なををべべとと地ちより忌いといい何なに代しろに
小こ主人しゆじんより忌いといいゆゆとと呼よび出だす用もち本ほんととももひひ付つ終はつ
他たへへもも哀あはれれくく出だああるるなり又また仁にん家け人にん一いつ月げつ忌い三年さんねん
忌い七年しちねん十三年じゅうさんねん廿七年にじゅうしちねん五十年ごじゅうねん忌い百年ひゃくねん忌いな
どいい年ねんああれれもも聖せい人にんの道みちははたたややれれ教きやう外がい遠えん

近小陽は毎年其死する月の七日は親しく参て
て情とそは是と忌日の礼とふつと成りたうとふこ
と礼も亦毎月の忌日といふことある一朝替はなせむ
親小礼と物とよくに時の物と具へて洋とつとむる
のも亦菓もよく初る生るの時とそれと薦めて洋す
る半の敷を二入魚等の類とよく物と物と物と
時とそれと薦小載て薦ふ進物以洋月よく家
及理なり皆孝子の情とそすのこ致小て誠ある時を
亦小て神ありを近定敷あることこれ墓祭の半ハ
文公家礼は詳あり天子七廟昭穆の半は中庸或原
畧これあり用ありハ守安とをせて足知て法
法身して後ハ墓祭の半ハ傍まはりたり小してふ

藩山先生告
位牌はハ情とそは是と忌日の礼とふつと成りたうとふこと
と礼も亦毎月の忌日といふことある一朝替はなせむ
親小礼と物とよくに時の物と具へて洋とつとむる
のも亦菓もよく初る生るの時とそれと薦めて洋す
る半の敷を二入魚等の類とよく物と物と物と
時とそれと薦小載て薦ふ進物以洋月よく家
及理なり皆孝子の情とそすのこ致小て誠ある時を
亦小て神ありを近定敷あることこれ墓祭の半ハ
文公家礼は詳あり天子七廟昭穆の半は中庸或原
畧これあり用ありハ守安とをせて足知て法
法身して後ハ墓祭の半ハ傍まはりたり小してふ

らそ情とそは是と忌日の礼とふつと成りたうとふこ
と礼も亦毎月の忌日といふことある一朝替はなせむ
親小礼と物とよくに時の物と具へて洋とつとむる
のも亦菓もよく初る生るの時とそれと薦めて洋す
る半の敷を二入魚等の類とよく物と物と物と
時とそれと薦小載て薦ふ進物以洋月よく家
及理なり皆孝子の情とそすのこ致小て誠ある時を
亦小て神ありを近定敷あることこれ墓祭の半ハ
文公家礼は詳あり天子七廟昭穆の半は中庸或原
畧これあり用ありハ守安とをせて足知て法
法身して後ハ墓祭の半ハ傍まはりたり小してふ

神も同奉
拾ひか
中付る
中付る

中付る
中付る
中付る
中付る

赤鬼悟道

さき梯門を出つて安波(おもしろ)く途中まで鬼ども松
窟(きつ)が杖(つゑ)とひく我(わが)く地獄の奴(やつ)あり然(しか)しもお庭(にわ)よ流(なが)りす
べにみちありはあゝとていふ雲(くも)窟(きつ)がいしく天地(あまのつち)あるふ
生(なま)ざるものみな道(みち)志(こころ)妙(たぎ)用(もち)ふあゝとていふとれぬ祭(まつり)
皆(みな)たの一端(ひもと)とゆへにいふとれぬ蛇(へび)らぞれ蟻(あま)の如(ごと)き
小(こ)むしまで生(なま)ぬ逆(さか)るゝとあゝとていふとんや鬼(おに)の造(つく)
化(ま)の中(なか)志(こころ)充(み)との如(ごと)き廿(にじゅう)二(に)法の(ほ)の灵(たま)妙(たぎ)り故(ゆゑ)泉(いづみ)下の(した)の津(つ)
僕(わが)す只(ただ)常(とこ)に成(な)るゝとあゝとていふとんやとすることか多(おほ)く
ぬ事(こと)とばかりいふとぬ事(こと)成(な)るゝとあゝとていふとぬ事(こと)と悔(くや)むとぬ
事(こと)ぬ事(こと)と重(かさ)へて祓(はら)ひと困(こま)むとぬ事(こと)ぬ事(こと)と道(みち)とあゝとていふとぬ事(こと)と
改(かへ)て後(あと)日(ひ)と悔(くや)むとぬ事(こと)ぬ事(こと)と悔(くや)むとぬ事(こと)ぬ事(こと)と

おれり世(よ)の一切(いっぺつ)の人(ひと)をぬ事(こと)成(な)るゝとあゝとていふとぬ事(こと)と神(かみ)と困(こま)め物(もの)とあゝ
そひ力(ちから)とあゝとていふとぬ事(こと)成(な)るゝとあゝとていふとぬ事(こと)と或(ある)は罪(つみ)とあゝとていふとぬ事(こと)と
滅(めつ)し宿(しゆく)願(ねん)族(ぞく)よぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と皆(みな)欲(ほ)すり生(なま)ぬ事(こと)ぬ事(こと)と
かゝるもいふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と重(かさ)ぬ事(こと)ぬ事(こと)と
うそ成(な)るゝとあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
禁(かぎ)ふ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
力(ちから)の及(およ)ぶ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
杖(つゑ)以(も)て大(おほ)磐(い)石(いし)以(も)て動(うご)かす事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
おれり事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
いとも若(わか)く樂(たの)しむ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
求(もと)む事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と
かゝるもいふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)ぬ事(こと)とあゝとていふとぬ事(こと)と

といへども、洗あらふ言ことば識しのるふ記し臆おそくしておのまふ試こころて修おとす
こころなく、自得じとくの期き有あるべし、学まなぶ自得じとくあらず、されば身みの
用もちなれ、下くだれ、自得じとくの心こころと、洗あらふと、洗あらふ子こも、洗あらふ人ひと
ごし、示しす、あれは、赤あか鬼おに言ことば下くだる大おほ悟ごして、退ひきき、款くわんどて
曰いひ、生死しじ禍わざ福ふくハ惑まよひの由よして、生なむ、死しの根ねなり、在あら、怒いか好ごう惡ご者しや
情じやうの動うごみ、ひれや、すれ、胎たあると、心こころ依よす、家けと、密みつあり、
さう者ものを、此こゝるより、妄まが心こころおこし、種たねの偽いつはり巧たくまし、是こゝより、生なれ
故ゆゑ不欲ほく、不ふと、形かたちづ、びと、そ、ま、ぬ、事こと、強つよく、おの、心こころ
ら、ぬ、事こと、と、物もの出いづ、み、そ、力ちからの、及およぶ、る、不ふ以も、覺さて、い、け、る、
非ひと、困こまめ、心こころ以も、心こころに、な、り、の、及およぶ、る、不ふを、天あまなり、天あまと、怒いか、り、た
天あま乃すなはち、入いる、修しゆふ、べ、く、世よ界かいお、心こころく、の、人ひとれ、ち、豈あなお、の、と、一ひと
万よろ半はんの、依よる、心こころん、や、天あま我われ人ひと乃すなはち、あ、不ふ私しく、修しゆふ、さ、換かは、し、

ち、我われ人ひとを、知しる、修しゆふ、さ、子こ細こを、一ひと只ただ世よ間かんよ、有ある、者ものは、若わから
の、事ことと、おの、ひ、て、天あま不ふ任にんせ、せ、不ふ安あんじ、ず、ら、あり、おの、事ことを、
は、不ふ安あんじ、ひ、ら、事ことあ、く、い、迷まよひ、て、ら、若わかむ、と、の、禍わざな、ら、ひ
と、事こと有ある、人ひとと、おれ、ど、い、を、不ふ生せいれ、る、人ひとと、同おなじ、く、苦くる若わか
す、下くだる、心こころの、人ひとの中なかに、お、の、ま、一ひとぬ、り、く、と、何なにの、言ことばも、れ、く
お、ん、と、を、り、い、大おほ膽たんの、心こころなり、人ひとを、不ふお、心こころい、よ、あ、り、く
若わから、ぬ、一ひと教おしを、も、れ、ば、若わから、ぬ、若わから、ぬ、一ひと在あら、怒いか、哀あはれ、事こと來きた
ふ、事こと生せい涯げの、る、の、客きやくなり、客きやくを、得とて、ハ、換かは、し、す、だ、れ、と、い、ふ
事ことも、あ、る、人ひとの、形かたちと、交まじり、出いる、と、の、波なみ、此こゝ情じやうを、ら、ん、や、ら、と、
ち、此こゝ事ことも、あ、る、一ひと一ひと事ことも、あ、る、一ひと一ひと事ことも、あ、る、一ひと一ひと事ことも、あ、る、一ひと
なる、事ことも、あ、る、一ひと一ひと事ことも、あ、る、一ひと一ひと事ことも、あ、る、一ひと一ひと事ことも、あ、る、一ひと
を、り、是こゝと、新あらたむ、と、せ、ば、本もと石いしは、同おなじ、く、一ひと一ひと亦また以も、快たく、さ、る

本もあらず一尺此等小悪痴の迷ひぬ時、内指初するに、
内指初せざる時、おのちのち、ふたふたひひく、意どく、迫りて、
是どあふ小憚、以、集、縛、せしむる、本、を、故、又、字、術、の、悪、痴、の、
根、と、初、と、安、と、ん、内、小、迷、心、あ、る、時、の、客、の、あ、ふ、う、ご、う、さ、れ、て、
客、を、主、と、位、以、う、を、ま、し、出、く、お、ふ、う、り、客、其、為、る、ふ、え、の、
以、ち、う、に、た、す、る、ん、と、初、と、困、ま、し、む、る、本、お、得、一、安、佚、苦、も、
ま、ご、を、り、そ、内、は、居、て、ま、ち、あ、る、ふ、お、の、ま、ふ、お、お、く、私、心、の、
迷、れ、さ、時、内、指、動、く、初、と、苦、し、む、る、中、を、お、う、ご、う、さ、れ、ま、し、
此、等、小、若、し、む、こ、う、一、今日、安、楽、の、客、小、を、て、夢、の、ま、あ、る、ら、
お、う、た、い、ま、ご、目、た、し、ら、け、く、ま、れ、眼、を、开、く、と、あ、く、え、
中、の、の、君、子、ま、な、ご、ん、只、生、死、福、福、の、大、念、を、悟、り、て、此、小、迷、
ふ、と、れ、く、心、の、妙、用、を、自、ぬ、く、と、悟、の、あ、ふ、ひ、う、ご、う、さ、れ、く、笑、

ト、我、心、小、さ、し、る、物、を、く、ひ、し、り、世、界、小、ま、て、物、の、あ、ふ、後、せ、
ま、ぬ、を、の、本、心、ま、た、れ、の、も、何、れ、只、志、の、ま、ご、う、ご、う、さ、れ、
幾、小、決、す、る、本、あ、ご、し、は、情、小、ひ、り、く、と、知、あ、ご、う、ご、う、さ、れ、
是、と、判、す、る、こ、と、あ、ご、し、は、地、獄、の、地、獄、の、あ、ご、う、ご、う、さ、れ、
志、の、懦弱、な、る、が、な、ご、一、切、の、惑、を、れ、君、痴、の、根、う、り、生、死、悪、痴、
を、氣、質、昏、濁、の、ま、極、な、る、者、れ、う、を、昏、濁、の、お、よ、り、動、出、
依、故、小、情、も、偏、小、く、重、く、意、し、昏、く、し、て、通、せ、ば、も、偏、れ、
者、重、き、し、の、濁、の、昏、き、者、交、つ、て、は、ま、よ、ひ、を、お、れ、故、小、何、と、
少、く、も、修、ず、る、こ、と、れ、く、人、と、し、う、ご、う、さ、れ、お、の、ま、ご、う、ご、う、さ、れ、
病、好、り、松、谿、曰、吾、故、や、此、心、を、自、ぬ、せ、ば、鬼、と、い、ふ、も、此、心、
を、く、ま、し、小、極、樂、生、生、な、り、亦、念、仏、と、た、の、む、し、と、れ、人、此、心、首、
は、す、ら、ば、佛、佛、即、寂、光、土、な、り、か、ご、鬼、と、決、つ、の、お、よ、ご、う、さ、れ、大、

勢あつまり大志を以てあざまけられたるのほりのあざ
ぶく虚をふりつるをきくれり鬼は八魂ほふ
みえりつるをきく後ハちりめなてええぬが人の脈の
下突ぬくごとくにいひみおほえぬめは出眼以用いて
足は枕しとも香を焼水とむけ胸の下氣流れ込ふ
をうらむ灸とす人妻子親族うちよりあふき立一方よ
てハ泣屋の念仏と申やうきうきぬ伴れり是ハ何半
成すりぞあつたふ先ぞ大とこまことと皆皆同音よ
とよみぐるうらふとてあつたこま湯よあふとこまぐらと
ては是もよき一つ此多なり

士會録卷之五 大尾

士會録自跋

六道勇士の物語ハ多多年少一不とあつめ奈小
紀して 市童蒙小校を格物の一助とするの友人
某他の小子某者あふあふを以て需む然とて市多言
の毀成恐とて藏はこころ一再来つて頻小して
曰是世と惑一人と誣仁義と充塞はれ妖言不
あらん小子軍子美人の内小一人志の助もあはば
吾を不世小おつく益何らん何れを各一く是は
秘をるや 市不得已して其繁茂列を衆を捨て
例の戲談はます一あ小丹一與之の識者そ

非と格くわ唯ただ予われう孝うやまつれふあいぐま童蒙どうもうの孝うやまつ也
因よてい字じハは仏者ぶつしや小阿せうあすすお月おつきく佛ぶつ語ご小せう家けおおててああハ
何なにぞぞやや曰いは予われ仏ぶつおおわわくく惡あくむむここととれれ一いつ善ぜん言ごんああるるバ
何なにぞぞううささううんんやや我われ道だう小せうああるるととてて他たのの善ぜん言ごんをを容ゆる
みみ家け者しや小せう人にんのの言ごん地ちありあり其その人にん仏ぶつ語ごををおお月おつきくく人にんのの知ち
るるりりありありてて耳みみ小せう人にんハハ其その至し情じやう小せう感かんするする者もの也なり
法ほふとと信しんををるるよよははああるるとと云いふふ于こゝ時とき
享保己酉暮春上浣 佚齋樗山識



文正三丙子二月三日字終

中村直道

